

その後いかがお過ごしですか？プロジェクト



## 根羽村森林組合



対応してくれた人の名前：今村 豊  
 調査員：浅田益章、洲崎燈子  
 レポート作成者：洲崎燈子  
 取材日：2016年10月20日  
 取材場所：根羽村森林組合



試作品の組み立て式ベッドに  
 横たわる今村さん

## 活動内容(「山村再生担い手づくり事例集」より)

従業員は43名。組合員の森林整備と生産木材の加工で年間総売上は4億円弱。年間200haの間伐を行っているが、材の搬出は52~60ha程度で材積5,000~6,000m<sup>3</sup>である。製材加工売上は2億2千万円程度であり、在庫の材や根羽村以外からの材を含め年間約2,500m<sup>3</sup>を加工して工務店に直送している。住宅1棟あたりおよそ20m<sup>3</sup>なので、年間およそ130棟分にあたる木材製品を出荷している。

## 前回の取材後、どのような変化がありましたか？

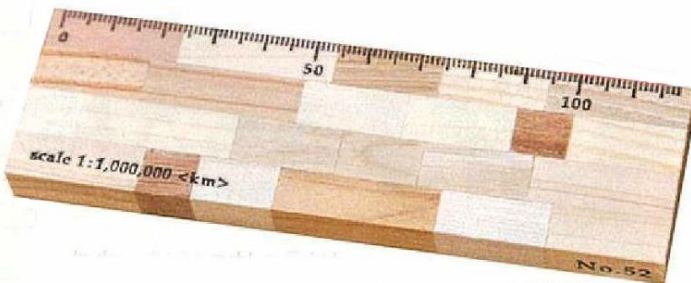
・一般市民が使うことのできる木材加工品は増えたが、個人住宅の着工数は減っている。どうするか、建築材以外にどんな木材の利用法があるかと考え、この3年間でさまざまな製品を作ってきた。



簡易セルフビルドハウス「3坪の家」



中房温泉の家族風呂「根羽の湯」(長野県安曇野市)



\* 流域ものさし。矢作川の長さ、118kmにちなんで11.8cm。  
 流域を学ぶワークショップで参加者が、矢作川流域のさまざまな木をモザイク状に並べ手作りする



\* 癒やし系の「木っころ」。フリーマガジン「耕Life」とのコラボ製品

## どこでもシリーズ



動く木のおもちゃ、スパイラルタワー。軽やかな音を立てながら落ちてくる木の球に、子どもたちは釘付け

(\*がついている製品の写真は  
耕Lifeより転載)



どこでもブランコ



どこでもオセロ、どこでもウッドデッキ

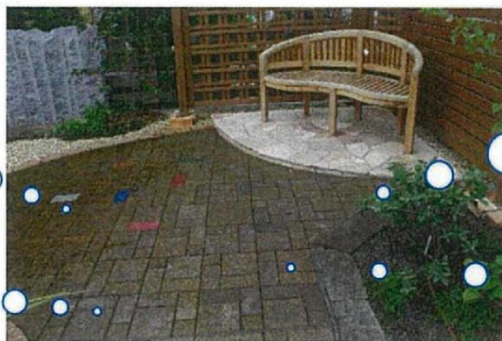


\* どこでももちつき機

- ◆安全・安心の木質100%の製品
- ◆地産地消

カラー  
48色あり

LED球の  
埋め込みもOK

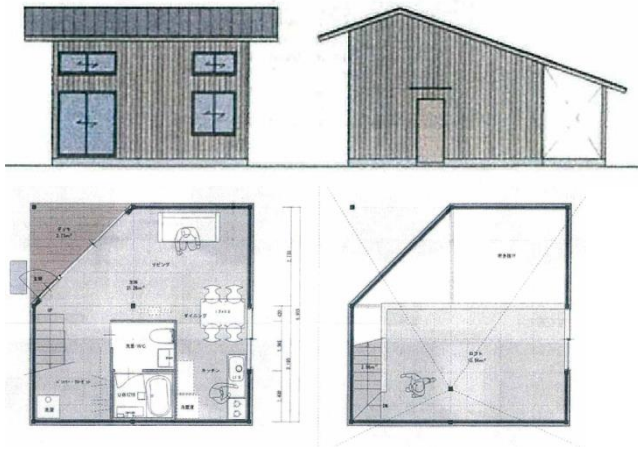


### 二酸化炭素の固定量

樹のれんが(1,000㎡当たり) 36.7t-CO<sub>2</sub>  
森のれんが(1,000㎡当たり) 45.8t-CO<sub>2</sub>  
木煉 (1,000㎡当たり) 55t-CO<sub>2</sub>

ブロックのサイズ  
3種類あり

環境性能重視型木質舗装材ブロック Weed Lock(ウィードロック) – 材料供給を検討中



9坪スマートエコハウス(ゼロエネルギーハウス)  
 2011年の震災後、仮設住宅の問題(傷み、利用期限、費用面の保証等)を見て、名古屋の(一社)アースパートナー協議会と開発した。上から見て正方形の一つの角を切ったスタイルで、配置によってさまざまなコミュニティとしての機能を果たせるのがポイント。上物だけで500万円以下に抑えることをめざしている。女川町に30棟建てたいと打診している。  
 木材の質には最も上等な上小節、2番目の特一、3番目の一等があるが、一等の材でも使えるようにしたい。

### ・3大学との連携による魅力的な根羽村づくり

信州大学<農林分野での連携、<sup>やまち</sup>山地酪農の導入>

里山の牛が一生を全うできるようにする。遊休農地を活用し、周囲の森を強間伐して森林空間を作り、放牧林にする。誰でも作れる簡易牧柵キットを開発し、簡易セルフビルドハウスを牛舎にする。根羽村プレイスメイキング(居心地のいい木の空間作り)事業の一環で、農林一体の取組。森林組合員がみんな特伐(特殊伐採)をできるようにして、広葉樹も活用できるようにしていきたい。

岐阜女子大学<森林体験、住居、環境分野での連携>

水源歩道の設置をめざす。最初の一滴を探す道。山里暮らしの指南をする「田舎の先生」制度を創設し、都市部の方が農家民泊をしに来た時に農林漁業体験や文化、歴史などをいろいろ教えられるようにする。建物景観のデザインとしては、個人向けのタイニーハウス(6畳程度の小屋)を計画している。地主が「田舎の親戚制度」を結んだ方に貸し、田舎の生活とさまざまな智慧や技能を教える。

愛知教育大学<木育分野での連携>

幼児～大人の木育構想に沿った、動く木のおもちゃの製品開発を継続して行う。タイニーハウスの横にトリトン(DIYの総合ツール)と作業小屋を置き、「田舎で真剣に物づくりをして」とアピールする。インスタレーション(空間全体を使ったアート作品)として山の上から沢まで木の球を転がす道等を作る。その他、子どもたちが遊びながら自然の中で原体験を得られるような場所をつくっていく。

### ・日本全国スギダラケ倶楽部矢作川流域支部の設立

2014年に日本全国スギダラケ倶楽部矢作川流域支部を立ち上げ、木づかいのPR活動「木づかいライブスギダラケキャラバン」を年間30回程度開催するようになって、イベントの実施や木のアイテム製作等いろいろなことを依頼されるようになった。特に豊田のまちづくりに関わる若い人たちとのつながりができたのはよかった。豊田のまちなかのイベントに出展したら、木製品のおかげで人が集まり、楽しみや感動が生まれた。豊田の森林組合さんとも木づかいの連携を図りたい。

木育をやっていると根羽村森林組合の名前が浸透する。「また来てね」と言ってもらえる。この矢作川流域を素晴らしい場所であると感じてもらいたい。発信しているとオファーが来る。人を巻き込むことが大事。イベントを自前でやっているとだんだん出先がお金を出してくれるようになり、資金に余裕が出てくる。日当を出せるようになったので、スタッフに余裕を持てるようになった。

前回の取材時の課題は解決に向かっていますか？現在の課題は何ですか？

Iターン職員の定着率向上は引き続き課題となっている。Iターンで森林組合に来ている人たちは、林業をやりに来ていて、村の暮らしを一番とはしていない。一般的な田舎の傾向として、縦の人間関係が強く、林業を志すような自由人には馴染みにくい。村を離れてしまうこともある。ここに来て住むようになった人たちには農地や森を与え、そこで新たなライフスタイルの確立にチャレンジしてほしい。行政が半額位助成してあげて、家を建てられるといいと思う。「根羽村っていいな」と思ってほしい。地域に愛着を持って技を磨き、チェーンソーをサラシに巻けるような人、特伐ができて、花桃が咲き乱れる桃源郷を作れるような人になってほしい。根羽村を、都会から来た人が魅力を感じる、本当の労働を提供できる場にしたい。そのことがIターン職員の定着につながる。

山村再生担い手づくり事例集の活用に関するアイデアがありましたら教えてください

木や森に関わる団体を集めて横のつながりを作りたい。森や山の感謝祭を海の関係者との協働で、山でも海でも開催したい。また、「田舎の親戚制度」を地域に定着させ、子どもたちに田舎や第一次産業の原体験をさせられる場面を増やしたい。

「気持ちいい〜」  
どこでも足湯

